

「愛すべき鉱物(3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

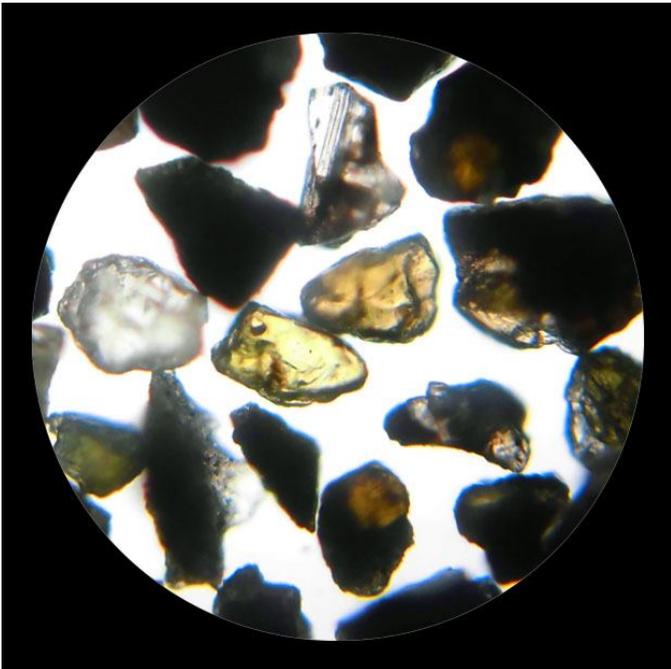
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

かんらん石も魅力的である。若草色をした美しい鉱物で、火山が創り出したとは思えない。小さな粒の標本は容易に入手できるので、小さな袋に入れて配ることもできる。



カンラン石はその色から「オリビン」とも呼ばれ、また大粒で色の美しいものは「ペリドット」という宝石としても人気がある。8月の誕生石にもなっている。



カンラン石は、火山灰中から容易に見つけることができる。無色の石英や斜長石、黒い磁鉄鉱や黒雲母に混ざって、薄緑色～黄緑色の粒が混ざっていたら、カンラン石である。

雲母類もすばらしい教材になる。雲母類の中でも突出して美しいのが「金雲母」という種類だ。金雲母は、宮沢賢治の「やまなし」の第二節に登場する。

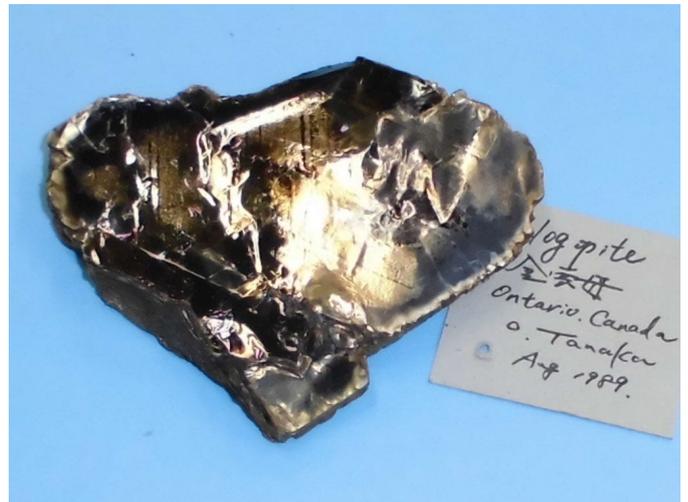
二、十二月 (宮沢賢治「やまなし」より)

蟹の子供らはもうよほど大きくなり、底の景色も夏から秋の間にすっかり変わりました。

白い柔かな円石もころがって来、小さな錐の形の水晶の粒や、**金雲母**のかけらもながれて来てとまりました。

そのつめたい水の底まで、ラムネの瓶の月光がいっぱい透すきとおる天井では波が青じろい火を、燃したり消したりしているよう、あたりはしんとして、ただいかにも遠くからというように、その波の音がひびいて来るだけです。・・・

賢治の「やまなし」は、6年国語の光村教科書に長く掲載され続けている。難解な童話として有名で、小学生には馴染みのない用語も登場する。「小さな錐(きり)の形の水晶の粒」は想像できるだろう。しかし「金雲母のかけら」は何のことだか、子どもたちはもちろん、指導する先生方にもわからないかも知れない。



金雲母は鉱物学的には他の雲母類と同じで、「六角形の結晶が薄く剥がれる」という面白い性質を持つ。これを「一方向のへき開」という。カッターや爪先で結晶を薄く剥がすことができる。賢治の文にある「金雲母のかけら」というのは、薄く剥がれた金雲母が、川の流れで砕かれ、鱗片状になったものをさすのだろう。鉱物学に精通した賢治らしい表現だ。

国語の授業では、多くの子どもが「金雲母って何だろう?」という疑問を持つにちがいない。6年の光村教科書を指導する小学校の教員は、この実物標本を一つ持っている、授業で大いに役立つだろう。